

依頼製作一覧

品名	数量	受託年度	本年度内 未竣工	依頼者
時鐘	壹個	前年度	竣工	益田彦五郎
内藤子爵銅像	壹軀	同	同	三宅正意
鶴鴿置物	壹對	同	同	三井八郎次郎
詩絵卓子、机	貳脚	同	同	下條康麿
書棚	壹個	同	同	華族會館
御書棚御料紙硯箱	壹揃	同	同	東宮職
鳳凰噴水塔	壹基	同	未竣工	藤田敏郎
御飾時計	壹個	同	同	東京市

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術学校近事〔一五〕^{卷号} T・六・一・三^{年月日}

●辭令

雇助手 小泉 勝爾

任東京美術学校助教授 (大正五年十二月十一日付)

臨時雇 森泉 倉三

雇を命ず

文庫掛を命ず (同年十二月十二日付)

囑託 前川 謙三

依頼解囑 (同年十二月十四日付)

文庫掛雇 板橋 進

依頼解囑 (同年十二月二十一日付)

囑託 笠原 留七

依頼解囑 (同年十二月三十一日付)

小林龜五郎

雇を命ず

製版科助手を命ず (大正六年一月八日付)

●授業始の式 授業始めの式は例年の如く一月八日午前十時より大講堂に於て舉行せられたり。式は校長の式辭に始まり、御眞影奉拜、勅語捧讀にて了れり。

●職員の年賀交換會 授業始めの式了りて後、職員一同は例の如く會議室に集り、吉例の大盃を舉げて新年を賀し、歡談時を移し散會したり。

●生徒募集 本年四月入學せし^(む)べむき生徒を募集す、詳細の事項を知らんとするものは郵券二錢を添へて申出づべし。

□募集人員

日本畫科 二十人 西洋畫科 三十人

彫刻科塑造部八人 彫刻科木彫部三人

圖案科第一部十人 圖案科第二部五人

金工科五人 鑄造科五人

漆工科五人 製版科八人

臨時寫真科 八人 圖畫師範科十八人

□入學願書提出期

本年三月一日より同月十五日まで

□入學試験

本年三月三十日本校内に於て施行す

東京美術學校近事〔二五―八。T・六・二・二八〕

●宮島書記遠逝 本校書記宮島孝氏は數年前より喘息を病み兎角健

●辭令

康勝れず、藥餌に親しむ日多かりしが、本月廿一日夜俄に病革り同

教授從五位 白山 福松

夜九時遂に逝去せらる、痛惜の情に堪えず、氏は明治三年一月五日

紋勲六等授瑞寶章（大正六年一月廿九日）

前橋に生れ、明治三十三年七月廿五日本校雇を命じ、庶務掛兼教務

芹澤 閑

掛を命ぜらる、後明治四十年三月十四日本校書記に陞任し、依然庶

務掛兼教務掛を奉じ謹直敦厚を以て稱せられたり、遺孤十五歳を首

として男女五人ありといふ。

●職員動靜

雇を命ず

○鹿島英二氏（教授） 十一月廿八日より往復十日間にて鹿兒島へ

臨時寫眞科助手を命ず（同年二月八日）

出張せらる。

教授 福井信之進

○正木直彦氏（校長） 奈良へ旅行法隆寺壁畫を觀覽せられたりと

休職を命ず（同年二月十五日）

○白山福松氏（教授） 大阪へ

雇助手 末弘 直士

○田邊至氏（助手） 伊豆地方へ

依願解雇（同年二月十六日）

○野口六三氏（助手） 横須賀市へ歸省

渡邊 啓三

○結城貞松氏（教授） 京都神戸福山大阪奈良へ

繪畫授業を囑託す（同年二月十七日）

○水谷鐵也氏（助教授） 關西地方へ

海野 清

○寺崎廣業氏（教授） 相州湯河原へ

雇を命ず

○矢代幸雄氏（囑託） 伊豆天城へ

金工科助手を命ず（同年同月同日）

○白井保次郎氏（教授） 大阪方面へ

●宮城拜觀 本科卒業期中の教員志望者及び圖書師範科第三年生に

○川合芳二郎氏（教授） 三重縣及岐阜縣へ何れも年末年始の休暇

宮城拜觀を差許されたるを以て、本月二十八日午前大村〔西崖〕生

を利用して旅行せられたり。

徒監白濱〔徵〕教授指導の下に拜觀することゝせり

●権田大僧正の講演 本校にては近頃大僧正権田雷斧氏の指圖の下に新調せる佛教服裝（袈裟、覆肩衣、絡膊、天衣、裙、朝霞、腰緋、祭纓）を購入したる以て、同師に請ひ、本月十六日午後一時より大講堂に於て其着用次第の講傳を聴問したるが、モデルに着用せしめて、佛、菩薩、明王、僧侶等の法衣について詳細なる説明ありたり。

●職員動靜

○屋代鉞三氏（書記） 去る一月十五日東京帝國大學より學生弓術教導補助を囑託せらる。

○水谷鐵也氏（助教授） 本郷區駒込神明町五四の新築成る。

○三浦柳三郎氏（助手） 二月二日御實父内田寛翁を亡はる。

○小島憲之氏（囑託） 第一高等學校に在職せらるゝこと三十六年の永きに及べる爲め、同校出身の有志者は來月中旬祝賀會を催し、岡田三郎助氏筆の肖像を同校圖書館へ掲げ記念とすべしと。

東京美術學校近事〔一五—九。T・六・三・三一〕

●辭令

書記 屋代 鉞三

弓術副指南兼務を命ず（大正六年三月五日）

●本科四年生の修學旅行 本年度京都奈良地方への修學旅行は來る四月十四日より同月二十九日まで往復十六日間（奈良に六日間京都に六日間）の豫定なりと。

●本校一覽の配付 大正五年より六年に亘る本校一覽は、去る二月

中旬を以て、本校卒業生一般へ、本校よりそれ〴〵配付せられたり。

●職員動靜

○矢代幸雄氏（囑託） 二月二十六日姉君を亡はる 御同情に堪えず。

○久米桂一郎氏（教授） 在原郡大崎町上大崎六三一へ轉居、電話番号も芝四五三〇に變更。

東京美術學校近事〔一六—一。T・六・四・三〇〕

●辭令

庶務掛雇 東谷七三郎

教務掛兼務を命ず（三月三十一日）

囑託 鈴木 信一

神奈川縣へ出張を命ず（四月九日）

教授 和田 英作

囑託 畑 正吉

學術實地指導の爲め京都府及奈良縣へ出張を命ず（四月九日）

書記 増井 兼吉

生徒修學旅行に付京都府及奈良縣へ出張を命ず（四月九日）

新納忠之介

本校生徒京都府及奈良縣修學旅行に付臨時實地指導を囑託す（四月九日）

囑託 米村 健一

依願解囑（四月十日）

故子爵黒田清綱家督相續人

黒田 清輝

襲爵被仰付（四月二十日宮内省）

書記 足立芳五郎

紋從七位（四月二十日宮内省）

●本年の卒業式 本校第二十六回卒業證書授與式は、例年の如く三月二十九日午後一時半より講堂に於て舉行せられたり。式は例の如くにして、先づ新卒業生著席し、次に各所よりの來賓卒業生來賓の式場に著席するや、正木〔直彦〕學校長病氣の爲め、高村〔光雲〕教授は校長代理として壇に上られ、式辭に引續きて、卒業生七十八人に順次卒業證書を授與せられ、尋で卒業生に對する告辭あり、次に岡田〔良平〕文部大臣は壇上に登りて訓辭を朗讀せられ、卒業生總代勝山恒躬氏の答辭ありて式を終り、それより來賓諸氏は別室に陳列したる卒業製作を觀覽し、職員卒業生諸氏は紀念の撮影をなしたり。此日曉來の雨に加ふるに、一時は降雨甚しく、午後の天候も氣遣はれしが、十一時頃より快晴となりたるは喜ばしく、來賓中には本校創立者なる濱尾〔新〕男爵も見えられたるは、座ろに創立の昔を偲ばれたり。當日の卒業生及作品目錄、文部大臣訓辭、卒業生答辭等左の如し。（や）

卒業生姓名及卒業製作目錄

（○印は圖畫教員課程兼修者）

日本畫科

海に近く

本科 勝山 恒躬 山形士

春光悠々

遠き國

初秋

秋山騎旅

奇峯朶秀

熟柿の頃

夕暮

仕度

來迎

西洋畫科

自畫肖像、小鳥屋

同、老婦母子

同、陽炎

同、收獲

同、鏡を持てる女

同、ひとりうらないのあと

同、穴

同、朝の祈

同、眠れる女

同、おんな

同、風

同、植樹

同、讀書のあと

同、風景

同 田上 尚之 富山平

同 福田 久也 東京士

同 ○狩野 威信 東京平

同 ○土肥 實 香川士

同 ○井桁 晋 東京士

同 ○青木寛四郎 長野平

同 佐々木義政 香川平

選科 佐取 輝三 栃木平

本科 ○川合改次郎 静岡平

同 保田重右衛門 和歌山平

同 ○坂本竹四郎 青森平

同 林 正三 茨城平

同 ○三浦秀之助 大阪平

同 鈴木 巖 愛知平

同 清水七太郎 岩手平

同 ○飯田 勇 山口士

同 徳田 多助 東京平

同 ○大沼林右衛門 宮城平

同 ○高橋萬之丞 長野平

同 ○三崎 道夫 福井士

同 石原 玉吉 埼玉平

同 ○鈴木 淳 東京士

同 大崎豊次郎 東京平

同、日の出 同 ○石黒 義保 長野平

同、牛 同 ○新井喜惣治 埼玉平

同、西湖 選科○巖 智開 支那

同、菜園 同 山田 隆憲 熊本士

同、夜讀 同 江 新 支那

同、ニンフの死 同 金 瓚永 朝鮮

同、讀書 同 汪 洋洋 支那

同、編物 同 雷 毓湘 支那

同、熟讀深思 同 方 明遠 支那

彫刻科

塑造部

浴後 本科 唐杉 誠一 東京士

これから 同 貝塚 七郎 三重平

男 同 片岡角太郎 大分平

睇視 同 升谷和一郎 石川平

温 選科 植田作卯衛門 京都平

凭れたる體 同 榊澤 清 新潟平

木彫部

水の行方 本科 北原鹿次郎 福岡平

悠想 同 松平榮之助 東京平

淵 選科 駒田 濱治 東京平

圖案科

第一部

緞帳圖案 本科○富田 基一 東京士

裝釘圖案 同 吉年 素彦 大阪平

各種工藝圖案 同 ○安江 孝治 石川士

卓子懸及窓懸圖案 同 ○石田 瑛 石川平

蒔繪書棚圖案 同 小西繁太郎 香川平

第二部

俱樂部設計圖案 本科 野澤 道平 愛知平

金工科 本科 田代辨次郎 栃木平

寶燈 選科 前田 實 東京士

手箱 同 石塚 明三 埼玉平

手箱 同 宮川 郁雄 東京士

香爐 同 丸山 義男 山形士

鑄造科 本科 山本與三次郎 富山平

阿彌陀佛 同 入江 憲吉 奈良平

文房具 同 伊藤 喬 山梨士

飾壺 同 伊藤 喬 山梨士

花瓶 同 伊藤 喬 山梨士

圖畫師範科 同 伊藤 喬 山梨士

篠崎松太郎 長崎平

松田 義之 愛知士

神田 義富 山梨平

諸橋 政範 新潟平

高橋 吉雄 岩手士

三森 連象 秋田士

大迎 左文 兵庫平

福田 惠一 廣島平

長澤喜久治 京都平

松岡 正雄 奈良平

林 義明 和歌山平

曾野 勝巳 三重士

饗場 基實 山梨平

太田 留雄 福島士

兼子 秀賢	茨城士	吉岡 修三	千葉平
久保 熙治	群馬平	片岡 憲輔	福岡平
辰野源太郎	長野平	早川 貞明	茨城士
八木 悌二	静岡平	半田 一雄	廣島平

鑄造科	二	一	四
漆工科	二	一	一
師範科	一六	二二	一
計	六九	一五	六四
			一四

文部大臣訓辭

美術ハ宇宙萬物ノ美ヲ發揮シテ、正純ナル趣味ヲ涵養シ、高尚ナル品性ヲ陶冶スル所以、必ズヤ高雅ノ韵正大ノ致、之ヲ觀ル者ヲシテ神爽ニ魂清ク、直ニ造化ト冥合スルノ懷アラシメザルベカラス。而モ斯ノ如キハ、修養ニ累スルニ修養ヲ以テシ、研鑽ニ次グニ研鑽ヲ以テシ、精妙ナル技術ト高尚ナル人格ト、綜セ兼ネタルモノニシテ始メテ之ヲ能クスベキ所、彼ノ或ハ纖妍自ラ喜ビテ流俗ニ倣リ、或ハ奇矯自ラ快トシテ努力ヲ怠ルモノノ、決シテ羸チ得ザル所タリ。諸子夫レ居常思フ此ニ致シ、自ラ警メ自ラ奮ヒ、刻苦勵精、以テ將來ノ大成ヲ期セヨ。

若シ夫レ教育ノ任ニ當ル者ハ、公務ヲ奉ズルコト熱誠ニ、生徒ヲ導クコト惻切ニ、奮ニ一技一藝ノ師タルノミナラズ、人格徳操共ニ衆生ノ範タランコトヲ努ムベシ。諸子ノ卒業ニ際シテ、一言ヲ述ベテ祝辭トス。

大正六年三月廿九日

文部大臣 岡田 良平

卒業生答辭

春風胎蕩萬物熙々タリ、東臺ノ櫻花笑ヲ帶ヒテ、將ニ芳蕾ヲ破ラントシ、不忍池畔ノ新柳眉ヲ開キテ青條ヲ梳ル、此時ニ方リ本校第二十六回卒業證書授與式ヲ舉ゲラレ、文部大臣閣下ヲ始メトシテ、朝野貴神諸賢ノ貴臨ヲ忝ウシ、大臣閣下ヨリ懇篤ナル祝規ヲ賜ハル、生等ノ光榮欣幸何物カ之ニ加ヘン。願レバ生等始メテ本校ニ學ビテヨリ茲ニ五星霜、諸先生ノ薰陶指導ニ由リテ藝術ノ過去現在ヲ知り、將來ノ趨勢ヲ窺ヒ知ル

科名	卒業生科別前年比較	本年の	選科生	同科生
日本畫科	八	一	一	一
西洋畫科	二六	二	二	七
彫刻科	五	七	一	二
木彫	一	三	一	一
牙彫	一	七	一	一
圖案科	三五	一	一	一
金工科	二	一	一	三
鑄造科	四	三	一	四
圖畫師範科	二二	一	一	二
合計	六四	一四	七	七八

ヲ得たり、高恩肝ニ刻ミ、何ノ日ニカ之ヲ忘却スルコトアラシヤ。惟フニ藝術ノ事タル畢生ノ業ニシテ、生等ノ前途遼遠タリ、自今以往其修得セシ所ニ基キテ、益々技能ヲ研磨シ、之ヲ將來ニ發揮セントス。其ノ間幾多ノ障害ハ固ヨリ期スル所、一意諸先生訓育ノ旨ヲ服膺シテ、造次顛沛ダモ敢テ懈ルコトナク、百難ヲ忍ビ萬苦ニ耐ヘ、孜々トシテ邁往セバ、未ダ必ズシモ涓滴ノ効ヲ致シ難カラズト信ズルナリ。刻苦勵精各々志ス所ニ從ヒ。以テ有終ノ美ヲ收メ、聊カ師恩ノ萬一ニ酬ヒ大臣閣下ノ高諭ニ答ヘ、且以テ今日ノ光榮ヲ空ウセザラン事ヲ期ス。

更ニ又出デ、圖畫教育ノ任ニ當ルモノハ、本校教養ノ趣旨ヲ奉戴シ、忠實其ノ職ニ盡シ、美術思想ノ普及ニ力ムル所アルベシ。不肖一同ニ代リ、謹デ蕪辭ヲ陳ベテ答辭トナス。

大正六年三月二十九日

東京美術學校卒業生總代 勝山 恒躬

●卒業製作陳列會 前項の卒業製作は、毎年の例により、卒業式の翌三十日に於て、卒業生の父兄及有志に觀覽せしめられたり。當日は好天氣なりしを以て、來觀者甚だ多く、二千八十七名と註せられたり。(や)

●新入學生 本年新入學生として四月六日入學を許可したる者左の如し。

豫備科(日本畫科)

常岡 文龜	兵庫平	吉澤 直貞	長野平
市川利三郎	三重平	高田 美一	香川平
宮地 芳信	和歌山平	境田 道徳	宮崎士
永峰 一正	香川平	川浪 養治	佐賀平
樋口哲三郎	新潟平	渡部 幸雄	福島士

豫備科(西洋畫科)

倉原 菊二	富山平	安念 敬夫	富山平
橋本 徳男	長崎士	川野 廣好	大分平
佐々木左作	長野平	宮川 利之	石川平
伊藤孝太郎	東京平	西 保	長崎士
木村 俊雄	宮崎士	坂木 喜次	東京平
川村 治夫	東京士	高野 健兒	岡山平
落合 寛茂	長野平	齋藤 教雄	東京平
飯村 哲	茨城平	根上 富治	山形平
武田乾一郎	宮城士	後藤 徳次	秋田平
川島 昌介	栃木平	光石 藤太	佐賀士
大海 清藏	山形平	大江寅五郎	佐賀平
三田 康	東京平	榎本 榮一	和歌山平
三谷 浩三	香川平	村上 三郎	東京平
坂本 幸一	岡山平	一木隲二郎	静岡平
佐々木松次郎	静岡平	鈴木 啓二	北海道平
熊谷 惣太	山口平	岡本 喜藏	東京平
笠原 千之	長野士	山田 勇	東京平
松本 銳次	大阪平	小野藤一郎	大阪平
飯守 好雄	和歌山平	大野加久二	愛知平
渡邊 昇	愛知平	田中英之助	兵庫平
菅野 泉	宮城士	長屋 勇	山口士
小平 正彦	長野平	鈴木 誠	岐阜平
河野 榮一	東京平	松尾 至誠	熊本士

中村 武平 福岡平
園部 邦香 和歌山平
山口 健一 岡山士
松本靜太郎 岡山士
原 愛造 和歌山平

豫備科(彫刻科塑造部)

安藤 照 鹿兒島士
小笠原貞弘 山梨士
江藤 陽吉 大分士
中村 良孝 石川士
岩田 基雄 東京士
兒島 矩一 岡山平
松田 尙之 廣島平
堀江 尙志 巖手士
泉谷喜一郎 石川平

豫備科(彫刻科木彫部)

田中 林藏 富山士
田中二三郎 東京平
原 規一 石川士
高橋 久勝 香川平

豫備科(圖案科第一部)

山賀 謙吉 東京平
齋藤芳太郎 香川平
原 祐四郎 京都士
吉村 二郎 長崎平
長澤 基 群馬士
水谷 仲吉 東京平
谷内 治橋 富山平
新井 賢次 群馬平

豫備科(圖案科第二部)

鈴木喜三郎 大阪平
田口 戌光 茨城平
川島 政次 兵庫平
雪野 元吉 神奈川平

豫備科(金工科)

深瀬 嘉臣 東京平
村岡幸太郎 香川平
泉川 喜六 香川平
山本 正麿 東京平
山口 中 茨城平

豫備科(鑄造科)

仁王浩一郎 静岡平
村上滿壽兒 福岡平
佐原亮太郎 東京平

豫備科(漆工科)

西野 健一 富山平
飯川 隆吉 石川平
勝山 重典 山形士
藤田 正一 香川平

製版科(第壹年級)

柿沼 保次 埼玉平
田沼 米吉 東京平
相生垣貫二 兵庫平
戸田 早苗 愛媛士
小川 省吾 長野士
鈴木 弘 東京士
野村 藤吉 石川平
野尻 榮一 富山平
津村 三郎 兵庫士

臨時寫真科第一年級

吉田 英男 巖手士
新井 欽吾 埼玉平
松尾 義明 佐賀士
原田 良雄 山口士
中山 十衛 福島平
河上 兼士 山口士
西村 一郎 東京士
小貫 道貫 茨城平
小野 郁也 山形士

圖書師範科第一年級

鎌田 次郎 巖手平
石野 視幸 岡山平
鹿兒島兼三郎 東京士
中村 秀三 埼玉平
弘井安太郎 高知平
新田 維義 島根平
宇田喜久雄 福島士
淺井 重次 大阪士
金井 勝衛 群馬平
加藤 龍治 宮城平

大山 新一	大分平	齋藤 好雄	群馬平
原 義人	長崎士	中村 中	廣島平
山内 秀一	滋賀平	利府 勝吉	巖手平
大八木定治	山形平	松岡 銀六	三重平
澤田 可一	新潟士		

因に、右の中日本畫科武田乾一郎は入學許可後廣瀬と改姓の旨届出あり、また漆工科の勝山重典藤田正一兩名は後れて四月九日入學許可したるものなり。

入學志願者及許可者前年比較表

志望學科	昨年の志願者	同上的許可者	本年の志願者	同上的許可者
日本畫科	四五	二六	六九	二八
西洋畫科	八七	三五	一〇七	三三
彫刻科(塑)	八	七	一二	九
同 (木)	三	一	四	二
圖案科(一部)	三二	一〇	三六	一〇
同 (二部)	八	四	一一	四
金工科	五	五	七	五
鑄造科	五	五	三	三
漆工科	五	四	四	四
製版科	一五	一〇	一四	九
臨時寫真科	二〇	七	一二	九
圖書師範科	六四	二〇	七一	一九
計	二九七	一三四	三五〇	一三五

● 研究生入學 今回研究科へ入學の諸氏左の如し。

日 勝山恒躬	日 田上尚之
日 狩野威信	日 佐取輝三
西 大沼林右衛門	西 三浦秀之助
木 松平榮之助	木 北原鹿次郎
師 久保熙治	塑 唐杉誠一
西 川合改次郎	西 山田隆憲
西 鈴木淳	金 前田實
鑄 入江憲吉	西 德田多助
日 富田賢太郎	金 田代辨次郎
西 巖智開	

備考 頭書の日は日本畫科、木は木彫部の略 以下に之に倣ふ。

● モデル規程改定 本校に於ては本年四月よりモデル取締方法を改むることとし、從來會計掛にて掌理せしモデル取締事務を教務掛に移し、モデルは検査の上採用し、合格者には一ケ年間有効のモデル證を交付することとせり。本校卒業生にしてモデル備入を要するときは願に依り一定の期間本校モデル選定所に於て選定することを許可することあるべし。

● 寫真科作品展覽會 本校臨時寫真科に於ては四月十三日より十五日まで三日間該科教室に於て第一回作品展覽會を開き、生徒の作品並に教員其他名手の作品を陳列し、寫真科及製版科の教室作業室をも公開して公衆の觀覽に供したり。

● 職員動靜

○ 黒田清輝氏(教授) 三月二十三日御養父樞密顧問官子爵黒田清

綱翁薨せらる。本校よりは總代として大村〔西崖〕教授葬儀に列し敬弔の意を表したり。

○正木直彦氏（校長） 三月中旬より御不快にて療養中なりしが四月中旬全快せらる。

○堀井政吉氏（助教授） 四月上旬栃木地方へ旅行せらる。

○關保之助氏（囑託） 四月中旬公用にて出雲及山城へ出張せらる。

○神木健介氏（教授） 宮内省の用務にて四月中旬京都へ出張せらる。

○松岡輝夫氏（助教授） 春休を利用して東北地方に遊び更に西下して紀州道成寺及び播州高砂地方へ旅行せらる。

東京美術學校近事〔一六一二。T・六・五・三一〕

●辭令

助教授 石井吉次郎

依願免本官（五月八日）

教授 神木 健介

學術研究の爲め大阪市へ出張を命ず（五月八日）

正八位 辻村延太郎

漆工科蒔繪實習及漆工史授業を囑託す（五月十九日）

囑託 六角注多良

漆工科調漆授業の外漆工製作實習授業を囑託す（五月十九日）

●職員動靜

○高村光雲氏（教授） 電話小石川一一八二番に

○結城貞松氏（教授） 電話小石川一五七三番に

○六角注多良氏（囑託） 電話小石川八三七番に孰れも小石川電話分局開設の爲め變更

○寺崎廣業氏（教授） 教授小堀鞆音氏教授川合芳三郎氏教授結城貞松氏助教授松岡輝夫氏は五月八日島津公爵邸へ行幸啓の際御前揮毫を上覽に供せらる。

東京美術學校近事〔一六一三。T・六・九・三〇〕

●辭令

囑託 小島 憲之

同 下田 次郎

助教授 小林 萬吾

囑託 岡田 起作

教員檢定委員會臨時委員被仰付（五月廿八日内閣）

教授 寺崎 廣業

同 小堀 鞆音

同 川合芳三郎

囑託 平田 宗幸

帝室技藝員を命ず（六月十一日宮内省）

從五位勲五等 矢野 道也

敍勲四等授瑞寶章（六月二十六日）

雇助手 八卷於菟三

任東京美術學校助教
雇助手 森田龜之助

雇 藤岡福三郎

任東京美術學校書記(以上六月三十日)

正五位勲四等 高村 光雲

紋勲三等授瑞寶章

從五位勲六等 海野 美盛

紋勲五等授瑞寶章

東京美術學校教授兼
東京高等工業學校教授
結城 林藏

東京高等工業學校教授
兼東京美術學校教授
安田 祿造

免兼官(以上七月二十五日)

正五位勲三等 高村 光雲

紋從四位(七月三十一日)

從六位 沼田勇次郎

紋勲六等授瑞寶章(八月二十五日)

教授 黒田 清輝

同 高村 光雲

同 岡田三郎助

同 和田 英作

同 寺崎 廣業

同 白井保次郎

同 小堀 鞆音

同 川合芳三郎

美術審査委員會委員被仰付(九月六日) 同 藤島 武二

校長 正木 直彦

教授 高村 光雲

同 岡田三郎助

同 海野 美盛

同 島田 佳矣

同 白山 福松

第五回圖案及應用作品展覽會審査委員會委員を囑託す(九月七日農商務省)

青山 正治

雇を命ず、文庫掛を命ず(九月十三日)

●職員動靜

○正木直彦氏(校長) 六月二十六日御母堂逝去の御不幸あり、本

會「校友会」總代として大村「西崖」教授葬儀に列し弔意を表す。

○香取秀治郎氏(囑託) 瀧野川町田端四三八へ

○海野清氏(助手) 本郷區駒込運動阪町三二七へ

○合田清氏(囑託) 豊多摩郡千駄谷町原宿一七〇番地二十四號へ

○和田英作氏(教授) 麻布區筈町八へ

○矢代幸雄氏(囑託) 北豊島郡雜司ヶ谷村五〇三へ孰れも轉居せ

らる。

東京美術學校近事「二六一四。T・六・一〇・三〇」

●辭令

囑託 矢野 道也

化學工業博覽會審査官を囑託す（九月二十六日農商務省）

書記 北浦〔大介〕

美術審査委員會に關する事務を囑託す（十月一日文部省）

教授 白濱 徵

學術實地指導の爲京都大阪府奈良縣へ出張を命ず（十月二日）

教授 鎌田彌壽治

化學工業博覽會審査官を囑託す（十月十五日農商務省）

囑託 澤村專太郎

印度旅行中アジャンタ窟寺壁畫の調査を囑託す（十月十八日）

岡部 覺彌

金工科彫金史の授業を囑託す（十月二十三日）

●創立紀念日 十月四日例年の通り職員生徒並びに卒業生參集大講堂に於て紀念の式典を擧げ、正木〔直彦〕校長の式辭ありて後本日の催として半月湯淺吉郎氏の平家琵琶に於ての講演並に平家琵琶小督の演奏あり、次に瀨山如山、三上代山兩氏の平家琵琶那須與一演奏ありたり、また別室に於ては本校所藏參考品の陳列あり、其品目左の如くにして概ね大正三年春の創立二十五年紀念祝典以後の購入する所に係る。

梵文陀羅尼地白描大和人物圖 金光明王經殘缺大和人物圖 傳土

佐經隆筆雪中行幸繪卷 醍醐寺五重塔板繪 秋月筆達磨五祖六祖

圖 啓書記筆月夜山水圖 千巖禪師贊中峰像 牘農筆樹下布袋圖

奈良法眼鑑貞筆達磨圖 尾形宗謙筆住吉明神圖 尾形乾山筆撫

子圖 藤磨筆樹下美人圖 建部巢兆筆田舍風俗卷 邊景昭筆蓮飯

雀圖 王元章筆墨梅圖 東山時代波千鳥蒔繪合子 高臺寺蒔繪沈

箱 高臺寺蒔繪角赤文庫 酒井田柿右衛門元祿八乙亥在銘平鉢

繪鍋島豆莢文様皿 岩倉室葵紋平皿 唐時代土偶 ペルシャ大鉢

隨仁壽鏡

●修學旅行 圖畫師範科第三年生は白濱〔徵〕教授指導の下に十月

三日出發京都大阪奈良の三府縣下を研究旅行し同月十三日歸京し、

又各科生徒の修學旅行は、十月二十四日より同二十七日までの間に

於て左の各方面に向つて行はれ、海野〔美盛〕、白濱〔徵〕、白井〔雨

山〕、島田〔佳矣〕、結城〔素明または林藏〕、櫻岡〔三四郎〕、鎌田〔弥

壽治〕、長原〔孝太郎〕、松岡〔映丘〕の教授助教教授其他指導として出

張せり。

日本畫科 箱根芦の湯〔塔の澤泊〕

西洋畫科 鹽原

彫刻科 箱根熱海〔芦の湯熱海泊〕

圖案科 箱根〔底倉、姥子泊〕

金工科 伊豆〔長岡、修善寺泊〕

鑄造科 日光〔中禪寺、湯元泊〕

漆工科 銚子〔大船津、本銚子泊〕

製版科 那須〔湯本泊〕

寫真科 伊豆〔伊東、熱海泊〕

師範科 富士川下り〔鰻澤、身延山泊〕

●美術史研究室新設 煉瓦建階下、元圖案科第二部教官室跡へ本年

九月より美術史研究室を設けらる。主として久米〔桂一郎〕森田

〔龜之輔〕矢代〔幸雄〕諸教員によつて使用せらるべしといふ。

●教室時事 建築圖案科第二部教官室圖書室教室の一部は煉瓦建の二階へ室替をなす▽漆工科は第一教室第二教室と分ち白山〔松哉〕教授堀井〔政吉〕助教辻村〔松華〕教員は第一教室を六角〔紫水〕教員は第二教室を擔任せらる。

●職員動靜

○神木健介氏（教授） 此程神宮司廳の用務にて宇治山田市へ、宮内省の命にて日光及伊香保へ出張せられたり。

○澤村專太郎氏（囑託） 十月二十六日印度へ向け出發せらる。

○岡田三郎助氏（教授） 正倉院御物拜觀の爲め奈良へ旅行せられたり。

○鹿島英二氏（教授） 同上。

○渡邊啓三氏（囑託） 同上。

○六角注多良氏（囑託） 同上。

○本多利實翁逝去 本校副科囑託弓術指南本多利實翁十月十三日午後七時逝去せられ、同月二十日午後二時谷中齋場に於て佛葬を営ま、本校職員一同より香奠を呈し總代會葬せり。翁の略傳は別に記すところあるべし。

東京美術學校近事〔一六一五。T・六・十一・三〇〕

●辭令

教授 古宇田 實

學術研究のため京都市へ出張を命ず（十一月五日）

教授 白濱 徵

學術研究のため福島縣へ出張を命ず（十一月五日）

教授 海野 美盛

教授 島田 佳久

造幣局に於て募集する銀貨模様圖案審査委員を囑託す（十一月十二日大藏省）

從七位 足立芳五郎

紋勲八等授瑞寶章（十一月二十七日）

●瑞典公使來觀 本邦駐劄瑞典公使ワールンベルグ氏は、同國より本邦の教育制度調査の爲め渡來せる同國女流教育家リンデン夫人を伴ひ、十一月二十六日日本校へ來觀、委しく視察せらる。

●職員動靜

○小林萬吾氏（助教授） 十一月二日より福岡市に於て作品展覽會を開かる。

○福井信之進氏〔（）〕（休職教授） 渡鮮金剛山の探勝を了へ之れより滿洲方面へ向ふ旨十一月十九日付通信を寄せらる。

○森芳太郎氏（囑託） 十一月廿二日大阪に住せられし御實母逝去せらる。

○岡田信一郎氏〔（）〕（囑託） 十月末より猩紅熱に罹り大學病院八澤内科病室に入院せられつゝあり。

○平田宗幸氏（囑託） 急性腸加答兒並に痔核の爲め九月末より引籠療養せらる。

○畑正吉氏（囑託） 十一月上旬より流行性感冒に罹り療養中の處此程快方に向はる。

●辭令

書記 屋代 鉸三

學生弓術教導を囑託す（十二月三日東京帝國大學）

戸部 隆吉

雇を命ず、美術史研究室助手兼教務掛を命ず（十二月十七日）

教授 結城 林藏

陸絛高等官三等

教授 沼田勇次郎

同 小堀 鞆音

同 川合芳三郎

同 藤島 武二

陸絛高等官四等

教授 神木 健介

陸絛高等官五等（以上十二月十九日）

●職員動靜

○小島憲之氏（囑託） 電話番号小石川二七〇〇に變更。

○長原孝太郎氏（教授） 今回番地の訂正により従來の三三三六番地

は三二七番地に改まりたりと。

○結城素明氏（教授） 本郷區西片町一〇への四號へ轉居。

○津田信夫氏（助教授） 電話番号下谷五九九〇に變更。

關連事項

① 制度改革の検討

大正五年の東京美術學校改革運動において本校の諸問題が指摘されたのを受けて、本校では大正六年から本格的に制度改革の検討が始まり、そのための教官會議が開かれた。第一の問題とされたのは授業規則の改正で、現存資料から見ると大正六年には二度改正案が作られたことがわかる。

第一の改正案（二月）では科を日本画科、西洋画科、塑造科、建築科、図案科、彫刻科、金工科、鑄造科、漆工科、写真製版科、師範科の十一科とし、日本画科、西洋画科、塑造科は五級とし、進級競技によって合格者を進級させ、建築科、図案科、彫刻科、金工科、鑄造科、漆工科は四学年、写真製版科、師範科は三学年とし、これら八科は学年（一学年―一年間）試験によって進級の可否を決める案、および、授業カリキュラム上では日本画科、西洋画科、塑造科は学科授業を極端に減らし、他の科も師範科以外は学科授業数を減らす案が示された。

第二の改正案（三月）では科を日本画科、西洋画科、彫刻科、建築科、図案科、金工科、鑄造科、漆工科、写真及び製版科、師範科の十科とし、日本画科、西洋画科、彫刻科（塑造か木彫のどちらかを専修する。）は五級に分け、第一級五月、第二級九月、第三級十一月、第四級一月、第五級三月の進級競技と予備競技により進級の可否を決定し、建築科、図案科、金工科、鑄造科、漆工科、写真及び製版科、師範科は第一の改正案と同じ進級法をとることが示されているが、授業カリキュラムは第一の改正案と比べて学科目数が大幅に増